

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/
午前11時40分～午後1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の
教頭先生へご連絡をお願いします。

夢物語 〈全4話中の第3話〉

北佐久郡川西が輩出した俊傑二人

～教育一途の人・五無齋と現代書道の父・天来～

立科町教育相談員 岩上起美男

立科小学校体育館に掲げられてある、現代書道の父、比田井天来先生揮毫の扁額「質実剛健」を仰ぎ見るとき、必ずや五無齋・保科百助先生の姿が扁額に重なり合うように浮かび上がります。そして、五無齋先生と天来先生が在りし日々を偲び、懐かしく語らいながら、全校児童を温かいまなざしで見守っているような気がします。

北佐久郡の川西が輩出した二人の俊傑の交流やこの扁額の由来に関する史料も言い伝えもなく、その史実は分かりませんが、両雄には史実には残されていない出会いと魂の交わりがあったのでしよう……。

今しばらく、老いの夢物語にお付き合い合
いいただきたいと存じます。

明治40年1月の或る日、天来は、配達された書状の差出人が五無齋・保科百助であることを確認した刹那、記憶の襞から、五無齋にまつわる風評や感慨が一気に迸り出た。

天来が脈絡もなく真っ先に思い起こしたのは、中山道であった。

まだ鉄道が敷設されていない時代、中山道(全長538km)は江戸(東京)・京都間の主要な交通路であった。東海道より40kmほど長かったが、河川の増水や

川止めなど、水難の多い東海道に比べ、中山道は安全で、皇女和宮をはじめ、降嫁の道中の多くが中山道を利用した。宿賃も安く、ゆったりした旅ができるという事情もあり、中山道の望月宿界隈には、遠い東西の都の華やきが漂っていた。

信州に遅い春が巡ってきたころ、一人倍の腕白で、旅人の瀟洒な身なりや言葉の雅な響きに心惹かれていた常太郎(天来の幼名)少年は、製糸工場を営む父母の目を盗んで、近所の子を引き連れ、この中山道の望月宿から茂田井間の宿、芦田宿を通り、笠取峠一里塚までの遠出を敢行した。それは少年にとって、未知の世界への胸躍る冒険の旅であった。

常太郎は、手前の小高い山々に遮られ、協和村の生家のある一帯からは眺望できない浅間山が、歩を進めることに見え隠れし、眺める場所によって多彩な山姿を見せることに心を奪われた。物事は、視座によって大きく異なる……。

芦田宿辺りから見えた、寺の境内に咲く満開の桜、浅間山に毅然と対峙する杉の巨木、そして、その右後方に聳える山並みの雄大な美しさに誘われ、北にしはし歩くと、分かれ(分かれ道)に道標が立っていた。

五無齋の書状を手にした天来の脳裏に、その道標に「横鳥村」と書かれていたこと、そして、この横鳥村の小高い丘から

眺めた浅間山とその西方に連なる雄大な山並みが鮮やかに甦ったのである。

天来は続いて、五無齋が極めて成績優秀で、指導力にも優れ、母校、山部誠倫学校と茂田井昭明学校に授業生として勤めた後、上田在住の高名な儒学者、恒川重遠の下で学問に励み、長野県師範学校に入学したことを想った。

当時、師範学校は、経済的な恩典もあり、学問を志す若者ならば一度は考え、憧れる進路の選択肢であった。書に魅了され、古碑帖の臨書に没頭していた少年、常太郎もその例にもれず、協和村と同じ北佐久郡の川西の横鳥村から「長野師範」に入学する4歳年上の存在は、常太郎にとって大きな刺激であった。

しかし、常太郎の天賦の書才と一心不乱に臨書する姿に驚嘆した前山村、貞祥寺住職の熱心な勧めもあり、常太郎は、後に書の道を選択した。

作品と理論の両面から近代書道を改革し、現代書壇の指導者となる多くの逸材を育成した功績により、書家として初の芸術院会員に推挙された天来にとって、この選択に微塵も悔いはない。だが、天来にしてなお、人生は分かれの連続であり、分かれに立つたびに、自分なりに真剣に考え、悩み、進むべき道を選択したが、ふと、あのとき、自分が選ばなかったもう一つの道は何処に進んだのである